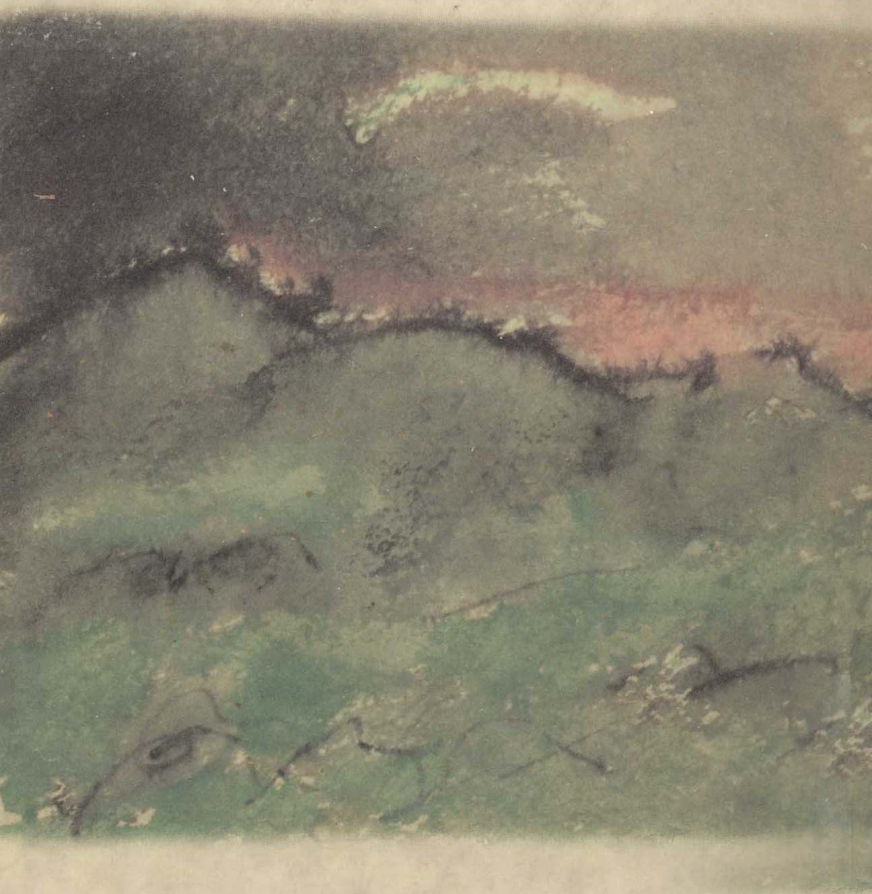


若狭憂愁

わが旅Ⅱ

水上 勉



若狭憂愁

わが旅Ⅱ

水上 勉



実業之日本社

若狭憂愁——わが旅Ⅱ

昭和六十一年十月八日 初版第一刷

著者 水上勉

発行者 増田義和

発行所 株式会社 実業之日本社

東京都中央区銀座一—三—九
電話(編集)五六二—二〇五一
(営業)五三五—四四四一

印刷所 東京研文社

製本所 共文堂

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

©TSUTOMU MINAKAMI 1986

Printed in Japan

ISBN 4-408-53073-5

若狭憂愁——わが旅Ⅱ／目次

北京の秋

直方にて

京の五番町にて

小田原にて

秋末の町歩き

京の初雪

京の雪、若狭の雪

冬、桂川

雪の寺泊まで（一）

雪の寺泊まで（二）

7

17

27

37

48

57

66

76

86

97

雪の寺泊まで(三)

107

雪の寺泊まで(四)

117

今宮神社のあぶり餅

128

紙漉き三昧

138

今年の桜

147

水俣にて(一)

156

水俣にて(二)

165

なんじゃもんじゃと柿の苗

176

若狭憂愁

186

再び犬見まで

195

カバ^バ絵
さしえ
水上 勉
装幀
安彦 勝博

若狭憂愁——わが旅Ⅱ

北京の秋

九月十九日の朝早く成田を立って、ひるには北京に着き、一泊して大連へ向い、瀋陽に二泊の旅だったが、二十三日の夜汽車で、ふたたび北京へもどった。勘定すると私には八度目の中国旅行だったが、その都度北京には一、二泊しているので、いちばん馴染んでいる都会である。対外友好協会の張和平さんとは、十何年か前の旅からすっかり仲よしになり、彼の方も日本へくると、必ず電話してきて、拙宅で歓談の時間をすごしてきた。ことし四十一歳。福建省の山村の出身で北京大学を出て、日本文学を専攻している。気さくで、男っぽくて、日本語もよく話すので、私だけでなく、中国を訪れる日本の文化人に人気がある。司馬遼太郎氏の「街道をゆく」の福建訪問の巻に何ども登場するので、すっかり日本でも有名になってしまった。

今回の私の訪問は、四十八年前に住んでいた、瀋陽の仕事場と住んでいた家の様子を探るの

が目的で、北京には直接の用はなかったのだが、先にきて二年も経っていたので、張和平さんをはじめ表敬したい先輩、知己はたくさんあった。それで、着いた日の午後は、対外友好協会長の王炳南先生が、療養先の病院を退院されてまもないことをしらせられていたので、先ずお見舞いに出かけた。対外友好のある場所は北京飯店に近く、市庁の前にある。ヒマラヤ杉や楊柳や、その他の樹木がこんもりと茂った古い建物だ。それぞれ別棟になっている。いつ来ても、ゆったりした敷地内に古風で、しかも洋風でもある建物に閑雅を味わうのだが、自動車も自転車も多くなり、往来もはげしくなった表通りから、塀一つへだてているだけで静寂なのは、樹木がしげっているせいである。その影を踏んでゆくと、夾竹桃とも芙蓉とも思える紫赤の花が遠くに球をちらしたようにのぞいている。落葉樹の葉先も黄ばみかけている。もう北京は秋だった。

王炳南先生は、私を接見室のソファへ招いて下さり、いろいろ愉快な話をなさった。先年日本へ来られた時、京都案内をうけもった私は、先生とバスに乗って二条城までお供したのだが、ホテルの窓から見えた南禅寺の境内を指さして、私がむかし入門していた寺の話をした。この時、王炳南先生は、禅寺の修行の方法についてたずねられ、私は草取りや雪隠そうじの日常をはなした。先生は草取りに興味をもたれ、私が杉ごけのあいだに生える一ミリぐらいの、水すましのような草までぬかないと、和尚に叱られたとはなすと哄笑された。その禅寺が、い

まは觀光の対象となり、寺院経営も宗教不在で大きくゆれうごいている事情をはなしたところ
いちいちうなずかれ興味をふかめておられる様子であった。退院までもないことでもあったの
で、少時いて退去したが、玄関まで送って下さった。

私はそれから、張和平さんと、同行したS社の岩波剛君と三人で大連へ向った。

二十四日に帰ってきて、嚴文井先生宅を訪問しているうちに、時間がすぎ、予定していた老
舎夫人の胡絮青女史を訪問する時間もなくなった。飛行機は、二時に出る。魯迅旧居を訪ねた
岩波君と空港で待ちあわせたのだが、時間すれすれにやってきた岩波君が、カバンの中から、
果が二つなっている葉づきの柿の枝をとりだして、

「これ……ことづかつてきました」

とわたすのである。びっくりした。岩波君はすぐにこういった。

魯迅旧居をたずねたあと、少し時間があまったので、老舎先生の旧居のあたりをうろつきた
いと思ひ、豊富胡同の露地の門前に佇んでいると、たまたま郵便物をとりに出てこられたお嬢
さんらしい女性に眼をとめられて、思わず会釈した。

「日本から来られたのですか」

「はい」

と岩波君はこたえ、あらたまった氣持になっていると、どうぞお入りになつて下さいと招じ

られたそうだと。岩波君はそんなつもりではなかった。そうそう北京にこれる身上でもないのだから、わずかな時間をぬすんで、かねてから尊敬していた老舎先生のお宅の外貌でも見て帰りたい、そんな思いだったという。お嬢さんのあとから、四合院造りの、いかにも庶民作家の居宅にふさわしい中庭へ入って佇んでいると、つき当りの本屋から、老夫人が出てこられて、さあどうぞ、と迎え入れられた。岩波君は、感激して、私とふたりで大連・瀋陽を訪問した帰りであること、私も一しよにくるつもりだったが、よんどころのない用事でこれなくなり、またの機会にぜひ訪問させていただく旨を代ってのべてくれたそうだと。すると、胡絮青女史は、本屋前の柿の木を指さして、

「ことしは残念なことに虫喰いが多くて、水上さんにさしあげるには、ダメな収穫になりそうです。けれども、水上さんは、この柿の味を知っておられるので、少しすそ分けいたしましう」

夫人はそういって、ハサミのついた竿で、巧妙に枝の一本のさきに、ふたつ果のたれてゐるところをぷつりと切って、それをお嬢さんのもってきた紙にくるまれ、

「これ、空港でさしあげて下さい。水上さんとは古い友人ですから、いつでもまた会えましょう。あなたも、ぜひ、これから友人になって下さい。しかし、こんどこられる時は、ひよっとしたらもうこの家は、昔のままではなくなり『老舎旧居』として、一般の参観に開放されるこ



紫の福

五十六
九月廿一日

とになっているかもしれせん」

とおっしゃったそうだ。岩波君は、そのことを私につたえると云い、深く頭を下げて退去してきたというのだった。私は、さしだされた柿を掌にのせて、見すえるしかなかった。

少し葉は生気をなくしてよわくなっている。果の一つはまだ青く硬いが、一つは黄色く色づいている。小ぶりなそれが、五枚か六枚の葉につつまれて、かくれるようにして、しっかりと枝についている。だがよくみると、ふたつとも虫喰いで、ヘタのところにノコギリクズのようなものが糸をひいている。これは虫が入りこんでいる証しで、そう思うと、葉のちぢんだ、肌にも、黒い斑点や白い斑点がある。女史が不作の年まわりだといわれたこともそれでわかるのだったが、眺めているうちに、それが持ち重りがしてきて、私には何か、ありがたい大事な重いもの思われて、ちょうど、食事の卓子の上だったので、これを皿のよこにおいて、しばらく眺め入るしかなかった。

飛行機の便の都合と、何やかや用事があった、女史をたずねる機会を失ったことが悔いられた。と同時に、初対面の友人に、わざわざ柿の果を托された夫人の心奥を思うと、私はふかい親しみと、女史の友情に感動しないではおれないのだった。

私に「北京の柿」という短篇小説がある。それは、何どかの北京訪問で、老舎先生の夫人に親しくしていただき、四合院づくりの中庭に植えられている二本の甘柿の由来について、話を

きいたことを小説にかいたものだ。くわしいことは、その小説にゆずりたいのだが、じつはこの柿は、老舎ご夫妻の新婚の記念に植えられたもので、老舎先生は、生前から、この柿の育成を楽しんでおられた。

「柿に五徳有り」といわれたのも老舎先生であつた。

一、夏はかげをつくつてくれて庭が涼しくなる

二、果はたべものになつて役に立つ

三、渋をもつ葉に虫がよりつかない

四、五月の新緑も、秋の稔りも風景が美しく眼を楽しませてくれる

五、うるさい鴉や雀がなぜかよりつかない

だいたい、このような五つの利得だつたかと思う。私はそれを徳ときいたように思うのである。だが、そのようにいって、生育を楽しんでおられたのも、結婚の記念樹でもあつたからだろうか。そう思つて、老舎先生亡きあとの庭にたたずんで、大きくなつた柿の梢を見あげていたら、二本ならんだ木が悲しく思えてきた。

「二本植えられたのには、理由があるのでしょうか」

「はい、どちらかが枯れても、一本は残るだろうから、と老舎は申しておりました」

若い頃に、そんなことを語りあいながら、若い奥さまと、苗木を植えておられる姿を想像す

ると、いまはその庭の主人のいない本家に、孤愁の身を画筆に托して、つつがなくくらしおられる胡梨青女史の心境が思われて、私には悲しく思えたのである。

小説は、このような随想的なものにすぎなかったが、発表された雑誌を張和平君に送ると、彼はさっそく中国語に訳して、夫人に手わたしてくれたようだ。夫人から長い読後感のお手紙をもらったのは、それからまもなくだった。また、日中文化交流協会の白土吾夫さんが、ちょうど柿の稔る秋に北京を訪れ、老舍夫人から、私へ、たくさんの果^みをあずかって帰国された年まわりもあった。私は、それらを大切に喰った。そして、そのこともまた文章にかいて、夫人に送った。

いま、岩波剛君から、さしだされた二つの虫喰い柿を眺めていると、以上のような、柿をめぐって私と老舍夫人とのあいだに通わされてきた事の経過が、つぎつぎと思い出されてきて、私はその虫喰い柿を、どうしても、日本にもち帰りたい思いにかられた。そうして、カバンの底に、これをしのばせたのである。

外国旅行をして帰国する場合、空港を出る際に、手土産品を検査される。税関の吏員が、密輸入品を取締るのである。また、そのほかに保健衛生の見地から、生物^{なまもの}、つまり果実や、その他のものを持ちこむについても厳重に取締られる。私は、その取締りのきびしさを知っていたから、虫喰い柿をもち帰る誇りを充分に噛みしめつつしのばせたのだ。そうして、もし、税関